

## 日本語学習者の読解における「読みのスタイル」の多様性 —使用ストラテジーの観点から—

菊池 民子

### 要 旨

日本語学習者の読解過程の研究はこれまで発話思考法を使って母語話者対学習者、言語能力の異なる学習者という対比で語られることが多かった。そこでは母語話者あるいは言語能力上位者は自らの既有知識を使ったトップダウンストラテジー (TD) の使用が、各言語要素に注目したボトムアップストラテジー (BU) より多いという報告がなされてきた。今回、大学留学生を対象に個人の使用ストラテジーに注目し、1章にわたる長文を数回に分けて読み進む場合と異なる文章を一定期間をあけて読んだ場合にその使用に違いが見られるか、に焦点を当てた。その結果はいずれの場合も個人の使用ストラテジーに違いが見られることはほとんどなかったが、文章の内容に馴染みのある場合には学習者個別のストラテジー使用に一定の傾向が見られた。又、読後の再生率と推論課題の成績には正の相関関係が明らかとなり、これに基づく読解能力上位3名の読みを詳細に見たところ、TDが多い、BUが多い、両者が拮抗しているという三者三様のタイプが得られ、読み手に特有の「読みのスタイル」とも呼べるストラテジー使用のあることが示唆された。

【キーワード】 トップダウンストラテジー、ボトムアップストラテジー、推論課題

### 1. はじめに

最近の日本語読解研究は、学習者が文章を正しく理解したかという結果に注目するものから、文章を読み進んでいく過程に焦点をあてて学習者の読みを解き明かそうとするものに移行してきている。それは文章の読解が複雑な営みであり、学習者が実際に読みの過程でどのような作業をしているのかを探る必要性が認識されてきたからである。読みの過程を見るために発話思考 (Think-aloud) 法<sup>(1)</sup>を用いた研究 (Horiba 1990, 2000, 森 2000、館岡 2001、鹿嶋 2002) が多く、読み手の使用ストラテジーや理解へ到達するまでの過程が徐々に明らかとなってきている。これらは母語話者対学習者あるいは言語能力の異なる学習者という枠を設定し、グループとしての一定の傾向を追ったものが多い。

対象を日本語以外に広げると、Block (1986)は英語学習者が読解中に使うストラテジーを

15 に分類し、さらに読み手のテキストへのアプローチの仕方から外延的(extensive)と内省的(reflexive)と呼ぶ二つのモードを設定し、前者を自分の経験や情報をテキストに適用する「統合的な読み手」、後者をテキスト内容から連想を広げる「非統合的な読み手」を作り出すものだとしている。また、Goldman & Saul (1990)はそれぞれの読み手は異なったストラテジーを使ってテキストから意味を引き出しており、読みには個人の柔軟性(flexibility)が顕著であるとしている。また、学習者と母語話者の使用ストラテジーの比較はさまざまな言語を対象に行われているが、日本語においても学習者は文章構造や自分が持っている既有知識に着目するより、文の各言語要素の理解に焦点を当てる傾向がある (Horiba2000、森 2000) ことが報告されている。さらに、Trabasso & Magliano (1996)では母語話者の読みにおける推論(inference)のストラテジーを3つ (説明、予測、連想、それぞれ explanation, prediction, association) に分類し、各推論同士に負の相関があり、それは読み手が一つのストラテジーを一貫して使う傾向があることを示していると結論づけている。以上のように様々な枠組みで読みの過程に迫ろうとする研究が行われてきた。

## 2. 本研究の目的

読みの過程に注目して読み手のストラテジーを明らかにして来た先行研究を踏まえて、本研究では学習者が使用するストラテジーを母語話者との比較、あるいは言語能力の違いによる比較とは異なる枠組みから探っていく。学習者にはその読み手個人が持っている「読みのスタイル」とも呼べる一定の読みの形、言い換えれば使用ストラテジーに一定の傾向があるのではないかと考え、二つの異なる条件下での読みを検討し、そのストラテジー使用の違いが見られるのか否かを探っていきたい。研究課題を以下の三つとする。

- ① 大学留学生の日本語読解において、与えられた二つの異なる条件下での読みのスタイルに違いが見られるか。
- ② 読解力を測る手段と考えられる読後の再生率と推論課題の達成率に関連があるか。
- ③ 日本語読解能力が優れた大学留学生の読みのスタイルには一定の傾向が見られるか。

## 3. 実験の概要

### 3.1 対象

大学学部1年在学中の留学生9名(うち1名は韓国からの交換留学生)で、このうち3名は2001年の日本語能力試験合格者である。各自の背景を表1に示す。

### 3.2 方法と手順

実験の実施時期は2002年10月～2003年1月、テキストは①岩波ジュニア新書「科学の考え方・学び方」（池内了著）1996年発行より「錬金術」「古代の自然哲学」の2節、②岩波ジュニア新書「心と脳の科学」（荜阪直行著）2001年発行より第4章：記憶の不思議、全35ページを内容から6回に分割。全部で8回実験を行ったが、そのうち第1回と第8回の課題文は①から、第2回から7回までの計6回は②から取った<sup>(2)</sup>。

表1：実験参加者の背景

参加者	性別	年齢	母語	学習歴	1級合格
A	男	25	クメール語	日本で2年	○
B	女	19	広東語	香港で2年、日本で2年	○
C	女	22	韓国語	韓国で2.5年、日本で半年	○
D	女	22	中国語	日本で2年	×
E	女	30	中国語	日本で2.5年	×
F	女	24	中国語	日本で2.5年	×
G	女	26	中国語	日本で2.5年	×
H	男	24	朝鮮語・中国語	日本で2.5年	×
I	男	23	朝鮮語	中国で3年	×

実験の手順は以下の通りである。

- 1) 実験目的を説明し、各参加者個別に発話思考法の練習
- 2) 原則として1週間に1回個別に実験施行
- 3) 毎回、課題文（実験者の判断で難しい漢字にはふりがな、難しい外来語には意味説明を加えた）を読みながら発話思考法による発話（母語、日本語ともに可）を録音、その後発話による推論課題の遂行（ここまでは戻り読み可）、短期記憶を減少させるためのアンケート記入、自由再生による記述（母語、日本語ともに可）、実験者とのフォローアップインタビュー。それぞれに時間制限はなし。これらの課題内容に関しては初回実験前に説明。
- 4) 発話プロトコルはすべて文字起こしし、使用ストラテジーはHoriba (2000)<sup>(3)</sup>を参考に分類した。評価は実験者と評定者Aで行い、一致率は84.3%であった。
- 5) 推論課題に関する発話プロトコルからその解答を0, 1, 2の3段階で評価し、学生個々の正答率を求めた。評価は実験者と評定者Aで行い、一致率は85.7%であった。
- 6) 各課題文は約900字～1600字であったが、それぞれをCarrell (1992)に従ってtop-level-structure(全体的な体系に関わるもの)、main idea（内容を伝える際に重要なもの）、supporting idea（上記2つ以外）のidea unitに分け、再生プロトコルは母語のも

のは日本語に翻訳後、各 idea unit に一致している数を数えた。言葉は違っても内容が変わらないものは採用した。評定は実験者と評定者 B で行い、一致率は 92.3%であった。全 idea unit を対象とした総再生率、top-level-structure と main idea を対象とした主要命題再生率を求めた。

上記三つとも評定者間で一致しなかったものは実験者が再度評定をし直した。

## 4. 結果と考察

### 4.1 課題 1

各回の発話プロトコルから使用ストラテジーを抽出し、7つのカテゴリーに分類した(付録参照)。「形態素・音素分析」、「単語分析」、「文の統語・意味分析」の3種を文章の各言語要素に注目するボトムアップストラテジー(BU)、「推論」、「一般知識使用」、「テキスト構造」、「モニター」の4種を、読み手が持つ既有知識などを利用するトップダウンストラテジー(TD)とした。使用ストラテジーの総数は個人によって162~342と幅広く、使用ストラテジーの種類にも偏りが見られた。結果を表2-1と2-2に示す。DとEはTDが70%を超えているが、その中でも一般知識を使用して内容に反応するストラテジーがそれぞれ全体の44%、68%と顕著であった。また、BUが60%を超えるAとGでは文の統語/意味の分析が全体の41%、50%を占めていた。なお、Iは録音音声不良のため、発話プロトコルの分析からははずした。BUの割合が50%以上のものを便宜上BU読み、以下をTD読みとして各回の読みを分けてみると、表2-2に示されるように読み手個人の傾向とテキストが持つ特徴が見えてくる。

次に、この個人が持っている「読みのスタイル」は、読むときに異なった条件が与えられれば変化するものなのか、あるいはどんな条件下でも変わらないものなのか、これを調べるために以下の条件で一人当たり全8回の実験を行った。①異なる内容の課題文を一定期間を経て読む(第1回と第8回)。②1章(全8388字)を6回に分けて読み進む(第2回~第7回)。この条件下での読みのスタイルの違いに注目してみた。

第1回と第8回の読みが変化するのは全8人中BとGの2人であるが、Bは後に詳述するように毎回BUとTDをほぼ拮抗する割合で使用する特徴があり、特にこの変化が第1回と第8回でのものと考えられる必然性はないように思われる。全体として見ると、同じ出典で内容が異なるテキストに対し、ほぼ2か月をおいて行った読みにおいても変化のない

表2-1：発話プロトコル中のボトムアップ (BU) とトップダウン (TD) ストラテジーの比率 ( )は回毎の%でBU+TD=100となる

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	合計
A: BU	25(67.6)	20(52.6)	42(80.8)	40(85.1)	32(58.2)	8(20.5)	18(52.9)	16(59.3)	201(61.1)
TD	12(32.4)	18(47.4)	10(19.2)	7(14.9)	23(41.8)	31(79.5)	16(47.1)	11(40.7)	128(38.9)
B: BU	4(40.0)	19(61.3)	9(40.9)	14(45.2)	7(53.8)	3(13.6)	19(55.9)	4(57.1)	79(46.5)
TD	6(60.0)	12(38.7)	13(59.1)	17(54.8)	6(46.2)	19(86.4)	15(44.1)	3(42.9)	91(53.5)
C: BU	15(51.7)	22(44.0)	10(24.4)	18(38.3)	34(75.6)	20(43.5)	12(26.1)	16(57.1)	147(44.3)
TD	14(48.3)	28(56.0)	31(75.6)	29(61.7)	11(24.4)	26(56.5)	34(73.9)	12(42.9)	185(55.7)
D: BU	6(19.4)	7(21.2)	13(31.7)	9(17.6)	7(17.5)	10(32.3)	9(30.0)	7(31.8)	68(24.4)
TD	25(80.6)	26(78.8)	28(68.3)	42(82.4)	33(82.5)	21(67.7)	21(70.0)	15(68.2)	211(75.6)
E: BU	3(20.0)	9(23.1)	9(23.1)	17(26.2)	12(16.9)	10(23.8)	8(16.0)	6(28.6)	74(21.6)
TD	12(80.0)	30(76.9)	30(76.9)	48(73.8)	59(83.1)	32(76.2)	42(84.0)	15(71.4)	268(78.4)
F: BU	14(73.7)	21(63.6)	15(51.7)	21(60.0)	15(50.0)	11(34.4)	9(56.3)	17(81.0)	123(57.2)
TD	5(26.3)	12(36.4)	14(48.3)	14(40.0)	15(50.0)	21(65.6)	7(43.8)	4(19.0)	92(42.8)
G: BU	10(41.7)	5(25.0)	23(76.7)	28(84.8)	21(75.0)	17(70.8)	29(78.4)	14(56.0)	147(66.5)
TD	14(58.3)	15(75.0)	7(23.3)	5(15.2)	7(25.0)	7(29.1)	8(21.6)	11(44.0)	74(33.5)
H: BU	3(25.0)	15(41.7)	4(28.6)	15(44.1)	27(64.3)	10(32.3)	18(58.1)	4(18.2)	96(43.2)
TD	9(75.0)	21(58.3)	10(71.4)	19(55.9)	15(35.7)	21(67.7)	13(41.9)	18(81.8)	126(56.8)

\*1回と8回は出典は同じだが単発のテキスト、2回～7回は連続した内容のテキスト (注2参照)

傾向が強く、読み手に特有の「読みのスタイル」とも呼べるストラテジー使用があると  
言えるのではないだろうか。

表 2-2 : 各参加者の読み

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
A	BU	*BU	BU	BU	BU	TD	*BU	BU
B	TD	BU	TD	*TD	*BU	TD	BU	BU
C	*BU	TD	TD	TD	BU	TD	TD	BU
D	TD	TD	TD	TD	TD	TD	TD	TD
E	TD	TD	TD	TD	TD	TD	TD	TD
F	BU	BU	*BU	BU	**BU/TD	TD	BU	BU
G	TD	TD	BU	BU	BU	BU	BU	BU
H	TD	TD	TD	TD	BU	TD	BU	TD

\*BUかTDが55%以下で両者の割合が拮抗しているもの    \*\*BU/TDが全く同数のもの

また、第2回から第7回までは、1章にわたる長文を6回に分けて読むものであり、当初の予測は内容や語彙の知識が回を追うごとに増えていき、それを裏付けるストラテジーの変化が見られるのではないかというものであった。しかし、そのことによる読みの変化は特に見られず、個別のテキストに対する読みの特徴が出ていた。まず、第6回のは8人中7人がTD読みを行っている。他の回は同じ傾向を示す例が、多くても8人中5人までであることを考えると、ひとつの特徴と見てよいと考えられる。この回の内容は短期記憶についてのもので、具体例として一夜漬けの話が出てくる。これに関しては大学生であれば経験者は多いはずで、非常に身近なトピックであるためTDのうちの一般知識使用の発話が増えている。また、第5回に関してはFがBU・TD50%ずつのため除外すると7人中、8回すべてTD読みの2人(D、F)を除いて残りの5人はBU読みを行っている。第5回の内容はそれまでの記憶一般に関する話から個別の記憶(この回は長期記憶)に移ったところで、少し専門的なものになっている。それが各言語要素に焦点を当てる読みを行う要因になったと考えられる。

#### 4.2 課題2

次に、再生プロトコルから求めた総再生率と主要命題再生率及び読後の推論課題の正答率を表3に示す。

推論課題の正答率と総再生率、主要命題再生率との相関係数はそれぞれ  $r = 0.789$

( $p < .01$ ),  $r = 0.656$  ( $p < .05$ )であり、有意な正の相関が認められた。これまで教師の経験からある程度自明とされてきたが、テキストをよく理解したものは、テキストの内容をもとにそこに直接書かれていないことを推測する推論課題の達成もより容易になるということが統計的にも明らかになった。鹿嶋 (2002) ではテキストベースと状況モデルの構築という視点から同じ結果が事例報告されている。

### 4.3 課題3

表3の9名のうち総再生率上位3名(A、D、B)は推論課題正答率上位3名でもある。総再生率が高いということは、読んだものの理解と記憶に優れていることを意味しているが、一方推論課題の正答率が高いということは、その文章には直接書かれていないことを読み手が自分の知識を使って読み取る能力に優れていることになる。よい読み手とは、どの問いには上記二点で共に優れた読み手を読解力が優れたものとみなすとの見解も一つの答であると考える。

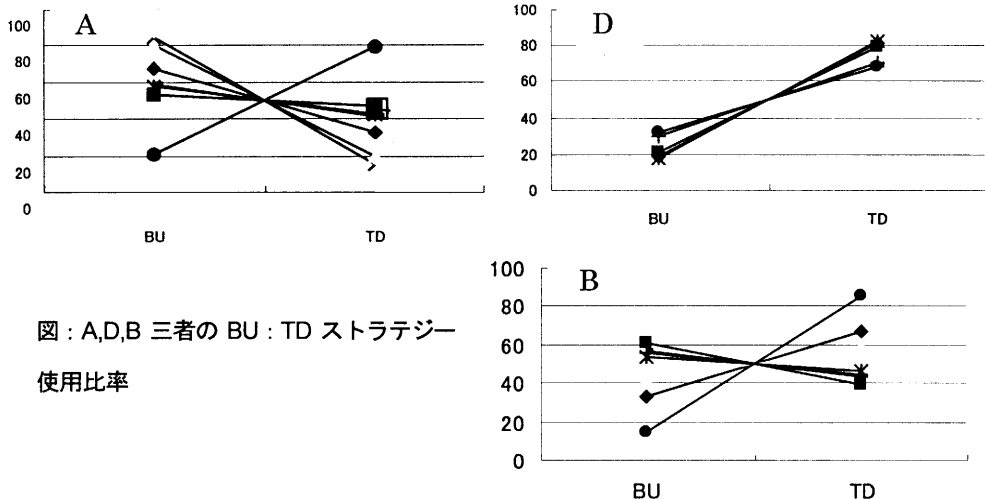
表3：総再生率、主要命題再生率及び推論課題正答率(%) ( )は標準偏差

	総再生率	主要命題再生率	推論課題正答率*
A	32.0 (8.6)	46.4 (10.6)	77.8
D	31.0 (12.4)	46.0 (11.6)	61.1
B	27.5 (7.3)	30.1 (10.8)	77.8
E	23.5 (7.8)	28.2 (3.8)	50.0
H	22.4 (13.4)	33.4 (22.5)	27.8
C	18.5 (10.0)	29.0 (14.8)	55.6
I	15.4 (8.0)	17.9 (14.7)	44.4
G	14.0 (6.1)	19.7 (11.7)	22.2
F	12.0 (10.7)	11.7 (9.8)	22.2
平均	21.8 (7.36)	29.2 (11.84)	48.2 (21.35)

総再生率の高いものから順に記載した。\*推論課題は全8回計9問の課題を0、1、2点で評価。0,1,2の3段階しかない為個人の標準偏差は求めている。

このA、D、B、3名が使用したストラテジーを表2で見ると、Aは全8回中7回でBUを多く使っており、そのBU対TDの使用比率の平均は61%：39%となっている。そしてBU：61%の中では「文の統語/意味の分析」が40%強を占めている。これに対し、Dは8回すべてでTDの使用比率が高く、その比率は24%：76%となっている。TD：76%の中で「一般知識使用」が45%、「モニター」が25%ほどである。また、BはA、Dとは異なり、全8回のうちBUが多い、TDが多い、がそれぞれ4回ずつである。その数値も拮抗しているものが多く、その使用比率は46%：54%である。このうちBUの「文の統語・意味分析」も30%、TDの「一般知識使用」も30%となっている。この3名の各回

の比率をグラフにすると下図のようになる。これら読解力上位3名のストラテジー使用はそれぞれの特徴を有しており、A:BU多タイプ、D:TD多タイプ、B:バランスタイプと言えよう。それは、これまで先行研究などで言われてきた「優れた読み手」はTD使用が多いという見解とは異なる事例であり、ストラテジー使用には個人差が大きいといえるのではないだろうか。



図：A,D,B 三者の BU : TD ストラテジー使用比率

次に、3人が推論課題で満点を取った第2回「脳と心をつなぐ記憶」の該当部分の発話プロトコルを検討してみる。本文と3名の発話プロトコル及び推論課題を以下に示す。

【本文】記憶は、脳と心をつなぐ“かけ橋”です。記憶によって私たちの過去、現在と未来は、継ぎ目のない連続したものとして感じられるのです。また、記憶によって、私たちは、自分についての記憶、つまり「自己意識」をもつことができます。試験の前日に“一夜漬け”で英単語をおぼえるのも、友達のおぼえるのも、やはり記憶によってです。英単語をおぼえるには言語的な記憶が必要ですし、顔をおぼえるには視覚的な記憶が必要ですが、脳の中では両方の記憶が働いていると考えられます。(この後、図による説明が続く)

【発話プロトコル】太字イタリック下線は読み手自身の発話、その他は読んでいる地の文、二重線は読まなかった地の文、下線上の( )はストラテジーの略号(付録参照)

【Aのプロトコル】

記憶は、脳と心をつなぐ“かけ橋”です。そうですね。脳と、記憶は脳と心をつなぐ橋文、記憶によって私たちの過去、現在と未来は、継ぎ目のない連続したものとして感じられるのです。記憶によって私たちの過去、現在と未来は、継ぎ目のない継ぎ目のない、つまり継ぎ目のない連続文、よくわからない( )また、記憶によって、



私たちは、自分についての記憶、つまり「自己意識」をもつことができるのです。記憶によって、私たちは、自分についての記憶、つまり「自己意識」をもつことができるのです。うー自己意識、自分で自分のことをわかっている(文)、記憶によって自分のことをわかる(文)。試験の前の日に“一夜漬け”で英単語をおぼえるのも、友達の顔をおぼえるのも、やはり記憶によります。一夜漬けってどういう意味?(単)それはわからない(モ)、試験の前日、一夜漬けで、ああ一晩で覚えるってということかな(単)。英単語をおぼえるには言語的な記憶が必要で、うー顔をおぼえるには視覚的な記憶が必要ですが、ああ言語を覚えるには言語的な記憶、顔をおぼえるには視覚的な記憶(文)、脳の中では両方の記憶が働いていると考えられます。つまり、両方ともいっしょに働いている?(文)

### 【Dのプロトコル】

記憶は、脳と心をつなぐ“かけ橋”です。記憶によって私たちの過去、現在と未来は、継ぎ目のない連続したものとして感じられるのです。また、記憶によって、私たちは、自分についての記憶、つまり「自己意識」心理学の勉強だ(般)。つまり「自己意識」をもつことができるのです。へへ?これは幼稚園からも持つんじゃないの?(般)子ども3歳から?記憶あって(般)、もう記憶あるのか。うん(般)。試験の前の日に“一夜漬け”で英単語をおぼえるのも無理だろう(般)。まあ、私もそうやってるけど(般)。友達の顔をおぼえるのも、やはり記憶によります。ね、そんな簡単なところで説明する意味は(テ)。英単語をおぼえるには言語的な記憶が必要で英単語を覚えるのは、そうかそれ、これ当たり前じゃん(般)。顔をおぼえるには視覚的な記憶が必要ですが、脳の中では両方の記憶がうごいて働いていると考えられます。両方だけですか(般)。感覚、触ったりとか、のは別にないの?(推)

### 【Bのプロトコル】

記憶は、脳と心をつなぐ“かけ橋”です。記憶によって私たちの過去、現在と未来は、継ぎ目のない連続したものとして感じられるのです。おっ、いい文、これ(般)。また、記憶によって、私たちは、自分についての記憶、つまり「自己意識」をもつことができるのです。じゃあ、記憶を失った人はどうする?(推)。試験の前の日に“一夜漬け”で英単語をおぼえるのも、友達の顔をおぼえるのも、やはり記憶によります。英単語をおぼえるには言語的な記憶が必要で、顔をおぼえるには視覚的な記憶が必要ですが、脳の中では両方の記憶が働いていると考えられます。はっ?言語上の記憶と視覚上の記憶も脳の中に・・・え?(文)両方の記憶が働いている(文)、脳の中では両方も記憶・・・つまり全部も脳の中に保存されてる、両方もある(文)。( )部分は広東語の発話

【推論課題】人の顔を見ると、なぜ言語的な記憶(人の名前)と視覚的な記憶(人の顔)が脳の違う場所で保持されると考えられるのでしょうか。それを証明する実際例は何ですか。

推論課題では言語的あるいは視覚的記憶のどちらかを思い出して、もう一方を思い出さないことがある、ということが表現されていれば可とし、実際例は当てはまるものな

ら何でもよいこととした。3名とも詳しさに差はあっても要点は押さえており、満点の2点と評価された。

A は、語と文の意味分析に注意を集中しており、本文を自分が理解しているかどうかを問い返しながらかみ進んでいる。ここでは、自分が持っている既有知識と対比させるタイプの読みではなく、書かれたものをきっちり理解しようとする姿勢が見て取れる。これに対してD は一般知識を随所に使って反応し、書かれた内容に対して自ら問いかけながらかみ進むタイプである。またB は文章表現自体の評価や書かれた内容の精緻化など、自分の知識や価値基準を使って内容に反応する反面、わかりにくい文に対しては母語に言い換えたりするストラテジーを使いながらその意味分析を進めようとしている。

これら三者の結果の背景として、漢字圏学習者か否か、母語での読みのスタイルの違いなども要因として考えられ、これらの検証も今後必要となるであろう。

この実験で読後の再生と推論課題の成績には関連があることが検証されたが、そこでの優れた読み手であるA、D、Bの発話プロトコルからはそれぞれの特徴的な「読みのスタイル」が認められる。そして、自分が持っている知識と結びつけて答える必要のある推論課題は3名とも正解であり、ある「読みのスタイル」を取れば正解にたどり着きやすいという結果にはならなかった。この3名が総再生率と推論課題の達成によい成績を残した、読解力に優れた学生であるという事実を踏まえれば、読み手に特有の「読みのスタイル」とも呼べるストラテジー使用のあることが示唆されたと言える。

## 5. おわりに

使用ストラテジーから「読みのスタイル」を考えた場合、それは個人差が大きく、優れた読み手のスタイルとして提出することは難しいと考えられるが、それでは、それが学習者の優れた読み手とそうでない読み手、母語話者と学習者の読みの比較において言われてきたこととどうつながるのか。優れた読み手や母語話者は一般知識を使って内容に反応し、テキスト構造に注目し、自分の理解に注意しながら読み進むといった、先行研究(Horiba 1990, 2000, 森 2000, 舘岡 2001, など)の結果とどこで関わるのか。本実験でも読みのスタイルは似たものであっても、総再生率や推論課題達成では大きく差が出てしまう例があり、今後の課題としてはこのような両者を質的に比較することにより、これらを分けているものは何であるのかを明らかにしていきたいと考えている。

## 注

- (1) 発話思考法は“Think aloud”の訳として使われているが、読解中に考えたり感じたりしたことを読み手にすべて発話してもらう方法である。これは本来読み手の内部で行われる情報処理、認知過程などの読みの過程を明らかにして、使用ストラテジーや推測の内容を把握しようとする方法である。しかし、現実には読み手が考えたこと全てを発話している保証はなく、またこの方法が本来の読みとは異なったものを現出させている可能性も否定できないが、現時点では読みの過程を把握する有効な方法と考えられている。
- (2) 8回にわたる課題文は以下のものである。(回:節のタイトル(文字数);出典の順)
- 第1回:錬金術(1054);『科学の考え方・学び方』(岩波ジュニア新書)池内了著(1996岩波書店)
- 第2回:脳と心をつなぐ記憶(1161);『心と脳の科学』(岩波ジュニア新書)葦阪直行著(2001岩波書店)、第4章「記憶の不思議」pp105~138
- 第3回:自分であることの記憶(1129);第2回に同じ
- 第4回:「どこから来たのか」の記憶、「これから何をしようとしているのか」の記憶(1591);第2回に同じ
- 第5回:記憶の分類、長期記憶(1661);第2回に同じ
- 第6回:短期記憶(1332);第2回に同じ
- 第7回:ワーキングメモリ(1514);第2回に同じ
- 第8回:古代の自然哲学(840);第1回に同じ
- (3) Horiba(2000)ではすべてのストラテジーを10のカテゴリー(①形態素/音素分析 ②単語の意味分析 ③文の統語/意味論分析 ④逆向き推論 ⑤精緻化推論 ⑥前向き推論 ⑦一般知識使用と連想 ⑧テキスト構造に関するコメント ⑨自分の行動に関するコメント ⑩その他)に分けた。①~③までを読みの処理の Lower level, ④~⑨を Higher level とした。これを参考に本研究では付録にあるように7つのカテゴリーに分類した。

## 参考文献

- (1) 鹿嶋彰(2002)「L2での説明文理解における既有知識使用の実態」『日本語教育学会秋季大会予稿集』190-195.
- (2) 館岡洋子(2001)「読解過程における自問自答と問題解決方略」『日本語教育』111, 66

- (3) 森雅子(2000)「母国語および外国語としての日本語テキストの読解—Think-aloud 法による3つのケース・スタディ」『世界の日本語教育』国際交流基金 10, 57-72.
- (4) Block, EL (1986) The comprehension strategies of second language readers. *TESOL Quarterly* 20: 463-494
- (5) Carrell, PL (1992) Awareness of text structure: effects on recall. *Language Learning* 42: 1-20
- (6) Goldman, SR, Saul, EU (1990) Flexibility in text processing: A strategy competition model. *Learning and Individual Differences* 2: 181-219
- (7) Horiba, Y (1990) Narrative comprehension processes: A study of native and non-native readers of Japanese. *Modern Language Journal* 74: 188-202
- (8) \_\_\_\_\_ (2000) Reader control in reading: Effects of language competence, text type, and task. *Discourse Processes* 29: 223-267
- (9) Trabasso, T, Magliano, JP (1996) Conscious understanding during comprehension. *Discourse Processes* 21: 255-287

付録：本研究で使用したストラテジーのカテゴリー (I~III : BU, IV~VII : TD)

( ) は略号、例文の【 】は発話者と課題文番号

I : 形態素・音素分析 (形) ; 文字の形態素または音素の分析

・ 一部分をなになににらす 照明、あ、テラス (照らす) 照明【D-No. 7】

II : 単語の意味分析 (単) ; 単語の意味の分析

・ 目にうかぶという意味はすぐおもいだすという意味です。 【G-No. 5】

III : 文の統語・意味分析 (文) ; 文や節の統語的または意味論的な分析

・ ワーキングメモリは情報の保持と処理、情報を保持しながら次の仕事をこなす。そうでないとワーキングメモリは働かないということです。 【A-No. 7】

IV : 推論 (推) ; 今読んでいる情報をもとに、前に出た内容と結びつける、このあとど

のような内容が来るかを考える、より詳しい内容を推測する、など

・ 今度は「短期記憶」を見てみましょう。こないだは長期的記憶だった。【A-No.6】

V : 一般知識使用と連想 (般) ; 読んでいる内容に対して、説明、評価、反応などをす

るために一般知識や連想を使う

- ・ アルツハイマー症・・・つまり老人ボケ。お年寄りになったら記憶がなくなっちゃう。ああいう病気だね。うちの母もいつも「私もそうなるかも」って言ってる。

【B-No. 3】

VI : テキスト構造 (テ) ; テキスト内の情報の構成に関してコメントする

- ・ なんかこの文章は、あまりよくわからないこと、わからない単語とか、文章を前において、次にこれを説明するようになっている気がする。 【C-No. 2】

VII : モニター (モ) ; 読み手が自分のストラテジーや理解の程度をコメントする

- ・ ノーベル賞、これわかる。 【G-No. 2】

きくち たみこ / 神田外語大学留学生別科

tkikuchi@kanda.kuis.ac.jp

## Variety of "Reading Styles" of Japanese language learners

— from their reading strategies' point of view —

KIKUCHI, Tamiko

Reading processes of university foreign students were examined by means of verbal protocols.

The results are:

- 1) The two different reading conditions (to read two different passages at an interval of two months, and to read 6 parts of a long chapter consecutively) did not influence their reading styles, but the text contents did.
- 2) The results of recall tasks and inference questions were significantly correlated.
- 3) Three good readers had their own types of reading styles, respectively.

(Kanda University of International Studies)